

## 現実との接点——批評と倫理

北小路隆志 (映画批評家)

**工** ドワード・ヤンの早過ぎた遺作『ヤンヤン 夏の想い出』(2000)に登場する10代後半のハンサムだがやや影の薄い男が、映画館へのデートに誘い出した恋人の女友だちに、およそ以下のような発言をする。「映画は人生を映す鏡だ。映画はふだんの生活を2倍面白くしてくれる。たとえば、僕らは殺人を犯さないけれど、それが何かを知っている。それも映画のおかげだ」。

歴史的に根強い映画への非難のひとつとして、映画で描かれる暴力が、それを見る観客に悪影響を与える……といったものがある。ヤンは、そうした映画に対するあまりにも素朴な道徳的断罪を揶揄するために、僕らには当然とも正当とも思える科白を若者に与えたのか。しかし、映画作家による問題提起はそんな単純なものではない。映画のラスト近くになって先の少女とともに僕らは、その少年が実際に殺人を犯してしまった事実を、テレビ画面を介し知らされるのだ。

映画作家の意図は、映画への道徳的断罪を批判することが、そのまま映画への道徳的擁護に反転する事態を回避することにあったのだろう。映画は道徳の名をもって断罪されるべきではないが、擁護されるべきでもない。もちろん、その種の議論が消えることはあるまいが、それは批評と無縁のものなのだ。実際に自分で手を染めるまでもなく、殺人とは何かを映画は僕らに教えてくれるが、現実の殺人の抑止となるわけではなく、それは映画の役割でもない。ただ、映画批評は、現実の忠実な反映であることからの解放

と引き換えに、映画が現実を解体するものでもあることを知るべきで、そうした認識が批評をして倫理に接近させるのではないか。道徳を基準とする映画への評価を斥けつつ、映画の両義性をもあらわにする偉大な映画作家の姿勢に、僕らは映画への倫理や批評の導入を見出す。

あらかじめ〈善／悪〉や〈真／偽〉の価値序列を強固に打ち立てるばかりか、その序列にしたがって僕らの生を裁き、萎縮させるものとして、ニーチェは〈道徳〉を徹底して批判した。仮に〈倫理〉をそうした道徳に抗するものと見なせば、それは、価値とは何かを問うことや、価値の転換、創造に関わるものだろう。映画批評はあらかじめ設定された不動の価値序列を信じないが、他方で何を書いても許されるといった悪しき相対主義からも身を分かち、何らかの普遍性への到達を欲し続けるのであり、それが批評に不可欠な倫理である。批評は基準(価値)を欠いては行使しえないが、そもそも批評抜きに基準(価値)が形成されるはずもなく、だから批評はつねに基準(criterion)を内包すると同時に、その基準の不断の転換や刷新をも恐れない。以上の僕なりの考えを机上の空論と見なさずいて欲しいが、映画もまた机上の空論ではない。繰り返そう。映画は現実の忠実な再現ではないが、現実の解体(=再構築)である点で、確実に「現実」に触れる。その映画が現実に触れる危機的な局面においてこそ、批評=倫理が要請されるのだ。

### ■ヤマガタ映画批評ワークショップ

映画祭というライブな環境に身を置きながら、ドキュメンタリー映画を通して、世界について思考し、執筆し、読むことを奨励するプロジェクト。参加者は、プロの映画批評家のアドバイスを受けながら文章を執筆し、それを一般に発表。

10/11-10/14 | 講師: クリス・フジワラ、北小路隆志